
仮面ライダー剣 MISSING ACE-NEO-

ホットコーギー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー剣 MISSING ACE - NEO -

【Nコード】

N4992Y

【作者名】

ホットコーギー

【あらすじ】

剣崎一真がジョーカーとなり、世界を救ってから4年後…

突如56番目のアンデッド・白いジョーカーが現れた！

白いジョーカーはカテゴリーAも含めた半数以上のアンデッドを解放し、バトルファイトを再開させる！

果たして、白いジョーカーの目的とは？

剣崎はライダーの力を取り戻し、ジョーカーの野望を防ぐことが出来るのか？

そして、「剣」と「ディケイド」の物語が繋がる…？

この作品は以前私がアルカディアで連載していた「仮面ライダー
アンデッド 不死生物と宇宙人」からクロス要素を抜き、焼き直ししてい
ます。

プロローグ

剣崎一真がジョーカーとなり、世界を崩壊の危機から救った日から、四年の月日が流れた…

ライダーシステムを開発し、人間の手によって開放されたアンデッド達を封印するために戦った組織・BOARDは、所長である烏丸啓、仮面ライダーギヤレンとして戦った戦士・橘朔也の手によって再編された。

復活したBOARDは、紛争や貧困に苦しむ国々の支援、そして未だ戦いの運命から解放されぬ二人のジョーカー、剣崎一真と相川始を運命から解放するための研究を主として活動が続けていたのである。

途中、橘のミスによるダイヤのカテゴリ10の解放という大事にも発展してしまったこともあったが、BOARDは四年の歳月の中で以前以上の発展を見せ、組織を大きくしてきた。

しかし、未だ剣崎と始を運命から救う方法は発見できず、研究は若干の行き詰まりを見せ始めていた。

そんな研究が停滞し始めた日々の中の出来事である。

群馬県と新潟県の県境に存在する三国山脈の一つ、谷川連峰の奥地の洞窟にて、大量の古代文字が刻まれた巨大な石版レリーフが発見されたとの情報が入ったのである。

調査の為、二人を救う研究の第一人者であった橘は、谷川連峰へと向かうこととなった。

もしかしたら、二人を救う為のキッカケになるかもしれない…そんな希望を抱きながら…

…

その日は、分厚い暗雲が立ち込める薄暗い不気味な日であった…

橘はレリーフを発見したガイドに案内を頼み、山の奥地の洞窟の前

へと立っていた。

突如、一粒の水滴が空から落ちたすぐ後にバケツを返したような土砂降りの雨が降り注ぐ…

橘とガイドは懐中電灯のスイッチを入れると、ゆっくりと洞窟へと足を踏み入れた。

洞窟の中は想像以上に薄暗く、何匹もの蛇が巢食う気味の悪い場所であつたが、橘は気にせず前へと進んでいく。

仲間を助けるための術があるかもしれないという希望が、橘の中に疼いていたからである。

やがて、二人は洞窟の最奥へと到達し、橘は電灯で前方を照らした。

「これは…！」

橘は息を飲んだ。

古代文字がびつしりと刻まれた五メートルはありそうな巨大なレリーフが、報告通り、確かに目の前に存在したのである。

報告に無かつたことと言えば、レリーフの中心に空いた大きめの穴ぐらいのものであつた。

もともと学者であつた橘にとって、この不思議なオーパーツは目を引かずにはいられない代物である。

「貴方が行っている研究と何か関係がありますか？橘さん？」

ガイドは橘にそう話しかけたが、橘の耳には入っていなかった。

「これが、剣崎達を救うための新たな希望となるかもしれない…」
新たな希望に高揚を隠しきれず、科学者としての冷静さを欠いてしまつていたこの時の橘には分からなかった…

このレリーフが、新たな戦いを呼び起こす火種となることに…

…

丁度その頃、断崖絶壁の上に位置するBOARD本部の研究室では、恐ろしい事態が発生していた。

突如何者かが研究室を襲撃し、施設を破壊してしまったのである。ライダーである橘が不在であったため、BOARDは満足な抵抗が出来ず、防衛が満足に行えなかったのである。

そして、所長である烏丸も様々な生物達の始祖であり、かつて四人の仮面ライダー達によって倒されたアンデッド達を封印したプライムベスタを守るために武器を手に取って戦ったが、やはり満足な抵抗はできず、重傷を負ってしまったのであった。

「お、お前は…！？」

何とかハートとダイヤのカテゴリ^{ミス}Aと、数枚のカードを守った烏丸は、薄れゆく意識の中で、研究室を襲った異形の影を睨んだ。

異形の影は半数近くのプライムベスタを手に取り、ゆっくりと自分が壊した壁へと歩いていく。

その姿は左右の装飾が逆であり、体色も白と赤と違っていたが、烏丸には心当たりがあった。

全てのアンデッド達の中で最強の戦闘能力を誇り、「残酷な殺し屋」、「最後の切り札」と呼ばれたアンデッド…ジョーカーであった。

白いジョーカーは体を赤く輝かせながらその姿を消すと、烏丸は気絶し、意識を失った。

そして気絶した烏丸のその手から、必死に握りしめていたハートのA「チェンジマンティス」、ダイヤのA「チェンジスタッグ」の二枚が零れ落ちた…

：

それから数ヶ月の日時が経過したある日のこと…

平和を謳歌していた日本の首都・東京の街にて、恐ろしい出来事が起こっていた。

「猪」、「海月」、そして「陸亀」の三匹のモンスターが現われ、白昼堂々と人々を襲っていたのだ。

この三匹のモンスターが四年前「仮面ライダー」によって封印された「アンデッド」達であり、邪な方向に進化した人類の駆逐、そして種の保存のための「バトルロワイヤル」を行い、自分が属する種族を地球の支配者にすることを望む者達である。

彼らにはあらかじめ戦うための運命が決められており、それに最後まで抗えるアンデッドは「ただ一人」を除いて存在しない。

本能のままに暴れるアンデッド達は自らの牙や怪力で次々に命を奪い、人間が作り上げたものを壊していく。

だがそんなアンデッド達の前に三台のバイクが駆けつけ、それから降りた三人の男女がヘルメットを外してアンデッド達に立ちはだかった。

「行くぞ！禍木！夏美！」

「ああ！」

「ええ！」

三人の男女は奇妙な形をしたバックルを取り出し、それに「ケルベロス」が描かれたカードをセットすると、それを腰に装着し、中心部を展開した。

そして三人の前に黄・赤・緑の三色のスクリーンが出現し、三人は自分達に迫ってくるそれを潜り抜けると、四年前とは違う新たな「仮面ライダー」へと変身し、各々の武器である「剣」「弓」「槍」を取り出し、アンデッドに立ち向かった。

「ラルク」「ランス」…そして「グレイブ」。

アーティフィシャルケプラーという特殊な合金系で縫われたスーツを纏った新たな仮面ライダーたちは、圧倒的な力でアンデッドを圧倒していく。

だが、この三人は「アンデッドを封印する」という使命のほかに、

「増長」という愚かな感情も持ち合わせていた。

先立ちのライダー達がもうおらず、戦う者が自分達しか居ないという環境が彼らに「増長」を与えてしまっているのだ。

三つの傲慢な刃は瞬く間に敵をなぎ払い、「ラウズカード」へと封印する。

三人は戦いを続けるたび、より強く、より愚かになっていくのであった…

新たにめくるめく戦いの運命の中、この三つの刃の「増長」を抑え、壊れそうな未来を守るための勇気の剣は…まだ目覚めない…

…

「ッセイ！ヌン！」

一方、新世代の三人が向かった位置と違う市街では、漆黒の仮面ライダーがムカデの祖であるアンデッド「センチピードアンデッド」と戦いを繰り広げていた。

仮面ライダーカリス・相川始である。

旧世代ライダーの中で唯一前線で戦っている彼は、獣に似たスピーディーな戦い方で自らの武器である「カリスアロー」を振るい、その刃で敵を切り刻んだ。

やがてバツクルを取り外してそれを武器にセットし、腰のラウズバシクから二枚のカードを取り出して「ラウズ」すると、必殺技の一つである「スピニングウェーブ」を発動させ、竜巻を纏った手刀でセンチピードアンデッドを切り裂いた。

そして「プロパーバシク」にアンデッドを封印すると、カテゴリ12「スピリットヒューマン」をバツクルにラウズして人間の姿へと「化身」した。

だが、戦いを終えた彼を支配していたものは以前のような戦いの後の高揚ではなく、例えようもない大きな空しさであった。

戦友である三人の内の一人、上城睦月はAのカードが解放されていて

るために変身することが出来ず、もう一人の橘朔也もとある事件で重傷を負ったBOARD所長・烏丸啓の代理と新世代の指揮で前線には出れず、親友の剣崎一真も行方不明…

新世代のライダー達は自分に協力するどころか旧世代である自分を疎むばかりで連携が取れない。

味方の居ない始はただ一人、孤独な戦いを続けることしか出来なかった…

「剣崎…」

始は悲しげな瞳で青空を見上げ、自分と同じ存在となって何処かに消えた親友の名を呟いた。

彼も、自分の運命と戦い続けているのだろうか？

…

「ふう…」

「今回も駄目だった。」

就職活動で面接試験を受け終えたばかりの上城睦月は公園のベンチに座りながらそう思った。

今回は一流企業の面接だったのだが、二人の面接官が面接の途中で喧嘩を始めてしまい、有耶無耶になってしまった。

だが睦月にはそれより気がかりなことがあった。

再び解き放たれたアンデッド達の事である。

橘からは「クラブのAも解き放たれてしまった。お前は普通の生活を送れ。」と言われ、就職活動に臨んでいるが、とても身が入らない。

だからといってもうレンゲルに変身する事もできないため、橘達の手助けもできない。

この世界に再び迫っている脅威を知っているのに自分は何もできな

い。

睦月はそれが腹立たしかった。

「剣崎さん……」

睦月は空を見上げ、自分の先輩ライダーであつた剣崎のことを思い浮かべた。

自分は三年前、橘のミスで解放されたカメレオンアンドンと戦つた際、駆けつけてくれた剣崎に橘達が剣崎と始を救うための研究をしているということを伝えられなかった。

彼は今、何処で何をしているのだろうか？

…

内戦が続き、人々が苦しみにあえぐ中東の戦地に、一人の男の姿があつた…

「ふあゝあ…もう朝か…やっぱり、ここじゃ寝心地が悪いなあ…」

男は埃っぽいベッドから起き上がると、大きな欠伸をした。

男がいた部屋には、家具が殆どなかった。

あるものは彼が寝ていた薄汚れたベッドと円形の古く、ボロボロな座卓、そしてヒビの入ったランプと、数本の薪の入った長方形の缶箱だけが置かれていた。

本当に殺風景な部屋だが、この国には物が殆どないため、家具が少ないのも仕方がない。

むしろ、ベッドが手に入っただけラッキーであると男は思っていた。ベッドから立ち上がった男は来ていた黒のタンクトップの上に薄い紺色の長袖の服を着ると、昨日汲んでおいた綺麗な水で顔を洗い、大きく背伸びをした。

「さて、今日も頑張らないとな！」

男は爽やかな笑顔で気合を入れ、部屋のドアを開き、自分が住んでいる小汚い小屋から、朝日がまぶしく照りつける外へと歩みだした。

男の名は剣崎一真…かつて仮面ライダーブレイドとしてアンデッド達と戦い、その身を異形の怪物へと変えて世界を救った男であった…

プロローグ（後書き）

すみません…本当に焼き直しになる予定です。

光の伝説も放置してこんなもの掻き始めてすみません。

バイオハザードもヒントにしようと思い始めたのですが中々思いつかなくて…

とりあえずこの作品はアルカディアで私が連載していた剣とハルヒのクロスの物語を基盤にしますので放置はしないと思います…

ダメな作者ですがよろしくお願いいたします…

ちなみにディケイド要素は終盤までありません。

第1話

自分が住んでいた小屋を出て剣崎が向かったのは、そこから二キロほど離れた小さな村であった。

その村は内戦地に近く、負傷した兵士がそこに運ばれてくることも少なくなかった。

財政は貧しく、支援団体の手もまだ行き届いていないため、剣崎は週に1度この村の手伝いに来ているのである。（ちなみに他の日は他の村の支援に行っている。）

そして村に着くと、村の村長が剣崎を出迎え、握手をしてアラビア語で話し掛けてきた。

剣崎も不器用なアラビア語で村長と話し、彼から手伝ってほしい事柄を聞くと、意気揚々と病院の方へと向かっていった。

「今日は病院の手伝いか…よし今日も一日頑張るとするか！」

村長から頼まれたのは、診療所で負傷した兵士や、戦いに巻き込まれた人々の手当である。

人手が足りないこの村は、まるで疲れを知らない剣崎の働きぶりに助けられているのである。

もちろん、剣崎が疲れにくいのはその強靱な体が原因であるのだが…

…

剣崎は強靱な肉体を駆使し、診療所でせっせと働いた。

医師が必要とする薬や道具を一気に運び、移動が困難な患者を抱えたり、背負ったりしながら、テキパキと手伝いを済ませていく。

そんな仕事の最中、患者達は皆剣崎に笑顔を見せ「ありがとう」とお礼の言葉を彼にプレゼントした。

剣崎は、この人々にお礼を言われる瞬間がとてもうれしかった。

皆心の底から剣崎に感謝し、必要としてくれる時間だけが、今の剣崎にとって何よりの至福だったからである。

剣崎は始達と別れた後、一度アメリカへと渡り、それから苦しんでいる人々たちを守りたいと、世界中の戦地を転々としてきた。

今まで自分達が助けてきた人たちの笑顔は、今でも記憶に焼き付いている。

辛い運命を歩む剣崎にとって、人々の笑顔は何物にも勝る心の栄養源なのである。

やがて、数時間必死に働いた剣崎に、休憩時間が言い渡された。

「よし！それじゃ、あいつらの所に行くか！」

剣崎は楽しそうな笑顔を作ると、子供のように駆け出して何処かへと向かっていった：

：

剣崎が向かった先は子供達が集まっている広場だった。

剣崎は仕事の合間、子供達の遊び相手をしてあげてくことを日課にしているのである。

少年達は空気の入っていないサッカーボールでサッカーをし、少女達は少ししおれた花でネックレスや冠を作っていた。

剣崎は少しぎこちないアラビア語で子供達を呼ぶと、子供達は彼に向かつて集まってきた。

それから、自分が思いつく限りの遊びを子供達と共に行った。

かくれんば、おにごっこ、けんけんば、あっちむいてほいなど、日本の子供達が行っている遊びの数々である。

子供達は週一で来ていた剣崎からそれらの遊び一式を教わっていたため、ぎこちなさなど感じさせずに剣崎と楽しく遊んだ。

一通り遊び終えた後、剣崎と一緒に遊んでいた一人の少女から、花で作ったネックレスを首に下げられ、プレゼントされた。

「カズマ、アゲル。」

少女は、剣崎から教わった簡単な日本語を喋ると、キュートな笑顔を見せた。

「サンキュ！大事にするよ！」

剣崎は少女の頭を撫でると、少女は嬉しそうに微笑んだ。

中東の国々は衛生状態が悪く、食べ物もあまりなく、この村は内戦で元居た村をやられて引越しをやむなくされた人々も多い。

幼いながら病気を抱えてしまっている子供、空腹に苦しむ子供も、両親のいないこの村には多かった。

この少女も村を失い、家族と共に今の村に移住した子供の一人であった。

剣崎は内戦に苦しむ人々を助ける日々を始めてからというもの、こういった心を痛める事情を何度も目にしてきた。

そんな悲しい目にあってきた子供たちに少しでも笑顔を与えたい…自己満足かもしれないが、剣崎はそう思っていた。

自分が遊び相手になってあげることですしでも寂しさを紛らわせてあげられたら…

そう考えると、休憩などしていられたのであったのである。

今では、剣崎にとって子供達の遊び相手となることは、人を助ける事と同じぐらいの心の栄養源である。

終わらない戦争の中で少数の人々を助ける事を誰かに偽善的だと思われるても構わない…

例えばそれが物事の解決にならなかったとしても、剣崎は悲しんでいる人々を見過ごすことはできないのだ。

やがて休憩時間も終わりが近づき、子供達とも別れる時間がやってきた。

子供達はもつと遊んでくれと剣崎に縋り付くが、剣崎は子供達の頭を優しく撫でていくと、笑顔で言った。

「よしよし！大丈夫だよ！仕事が終わったらまた遊んでやるからさ！」

渋る子供達にそう言い聞かせると、剣崎は再び村の診療所へと戻っていった…

…

それから剣崎は、料理や洗濯の手伝いを診療所で行い、本日頼まれていた仕事の全てを数時間かけて丁寧に終わらせた。

剣崎自身はもつと手伝ってもよかったが、診療所で働く人々があまり剣崎を頼ってもいけないと遠慮したため、厚意を受け取ったのである。

選別として少しの日用品と食べ物を買った剣崎は、少し汚れた袋にそれを詰め込んだ。

いくら死の概念がないアンデッドといえど、剣崎は元は人間。人間らしい生活をしながら生きていきたいと願うのは不自然ではなかった。

剣崎はこうして、生活に必要な物を調達してきたのである。

「よし、それじゃ約束を守りに行くかな。」

剣崎は袋を手につくと、先程遊ぶ約束をした子供達の元へ向かおうとした。

だがその時、剣崎の研ぎ澄まされた感覚が無数の悪意を感じ取った。

「うつ…！？」

剣崎は思わず日用品と食べ物が入った袋を地面に落としてしまい、額を右手で押さえつけた。

「何だ…この感覚は？」

剣崎が疑問を口にすると同時に、診療所の外から多くの人々の悲鳴が沸きあがる。

剣崎はその悲鳴を耳にすると、一目散に診療所の外へと駆け出して行った。

…

病院の外に出た瞬間、剣崎の表情は驚愕に彩られた。村の人々が無数の白いゴキブリに似た怪物に襲われ、食い殺されていたのだ。

そして怪物の姿を見た瞬間、剣崎は目を大きく開き、叫んだ。

「ダークローチ！？」

怪物達は自分、もしくは親友である相川始が「バトルファイト」に勝ち残った際に出現する全生命のリセッター・ダークローチに酷似していたのだ。

だが怪物達の体色は黒く彩られたダークローチと違い、白である。完全に、自分が知っているダークローチの姿と違っているのだ。

こいつらは一体何者だ？

剣崎は彼らの正体について考えようとしたが、その間にも人は襲われていく。

まず剣崎は怪物達の撃破と人々の救出を決め、異形の敵へと向けて駆け出して行った。

「止める！相手は俺だ！」

剣崎は白いダークローチ達へと飛びかかると、ライダー時代に鍛え抜かれた戦闘能力を駆使し、戦いを挑んだ。

「ハッ！おりゃあ！ウェイ！！」

剣崎のパンチやキックは人間の姿のままでも高い威力を誇り、一撃で怪物達を地面に叩き伏せていく。

しかし、剣崎がどれほど強く、相手の戦闘能力が低いといっても、剣崎が一人に対し、怪物達は無数だ。

加えて剣崎は人々を守りながら戦っているため、状況的に不利は必至である。

そんな物量に苦戦しながら戦う剣崎の目に、転んで膝を打ち、泣いている少女の姿が目に入った。

先程自分に花のネックレスをプレゼントしてくれたあの少女である。そして動かない獲物を怪物達が見逃すはずもなく、数匹の白いローチ達が不気味な叫び声をあげながら少女へと襲い掛かった。

「危ない！」

剣崎は自分が戦っていたローチを突き飛ばすと、人間を凌駕した驚異的なジャンプ力で少女の前まで移動し、両腕を広げて盾となる。

「止めるおおおおおお！！」

剣崎の絶叫と同時に気色の悪い音が響き、怪物達の爪が深々と剣崎の腹部へと突き刺さった…

…
少女はいつも剣崎と遊ぶ広場で、彼の仕事が終わりに、広場に来てく

れるのを待っていた。

剣崎が来たら今度はどんなことをして遊んでもらおうか？

わくわくしながらそんなことを考えていると、村の方から悲鳴が上がった。

何事かと思い広場の外に出てみると、見たこともないゴキブリに似た怪物達が人々を襲い喰らっていたのである。

怪物達はすぐに少女の姿も見つけ、新たな餌を求めて少女へと襲い掛かってきた。

少女は一目散に逃げたが、逃げる途中で強く転んでしまい、痛みで歩けなくなってしまった。

そんな少女に、怪物達が爪を向けて襲い掛かる。

「もうダメだ…」

諦めた少女は固く瞳を閉じて死を覚悟した。

だが、いつまでたっても怪物達の爪が少女の肌を切り裂くことがない。

少女は恐る恐る目を開けると、少女の眼前には信じられない光景があった。

少女が大好きだった剣崎が、自分の代わりに怪物達の爪に突き刺されていたのだ。

毒々しい、「緑色の血」を流しながら…

「カズ…マ…？」

「グッ…ウオオオオオオオオ！！」

剣崎は自分を刺している怪物を殴り飛ばすと、少女の方を少し振りかえり、再び前を向いた。

そして天を向き、獣のような雄叫びで叫ぶ。

剣崎の咆哮は周囲を震撼させ、体は水のような輝きで覆われてその姿を変えていく。

体は黒く、より獰猛な形状へ、腕と足は緑色に変色し、爪はより鋭

く変化する。

次第に、明るい笑顔が特徴的だった顔も、牙を剥き出しにした凶悪な獣のような顔へ変化すると、胸部の宝玉に似た個所が先程の血の色のように緑色に輝いた。

これが剣崎の本性であり、史上最強のアンデッド・ジョーカーである。

「ウオオオオオオオオオ！」

ジョーカーは再び吼えると、自らの武器である破壊剣・オールオーダーをその手に召還し、怪物達へと切りかかった。

その姿には、少女が大好きだった優しい剣崎の面影は微塵も残されていないかった：

獣のように激情に任せた雄叫びを上げたジョーカーは手に持ったオールオーダーを構え、白い凶獣達に襲い掛かっていく。

怪物達は群れを成してジョーカーに襲い掛かったが、「雑魚」である白のローチ達などジョーカーの敵ではなかった。

正面、上空、背後、ジョーカーはあらゆる方向から襲い掛かる怪物達を自らの剣で柔らかい肉のように切り裂いていく。

切り裂かれた怪物達は次々と火花を上げて白骨化し、消滅していく。驚異的な数で人々を襲っていたローチ達は次々とジョーカーに倒され、数を減らしていった。

それから数十分ほどの時間が経ってほとんどのローチが倒され、やがて最後の一体となったローチの腹部をジョーカーの剣が貫いた。

「ア…ア…」

ローチは息も絶え絶えにジョーカーに向けて手を伸ばすと、ぎこちない人語で言葉を発した。

「ニホン…コイ…ソコデ…アラタナ…タタカイガ…」
「!？」

ローチは素晴らしい残すと、白骨となり、消滅した。
戦いを終えたジョーカーはオールオーバーを下げ、助けた少女の方に振り返った。

少女は驚愕に染められた表情のままジョーカーを見つめ、ジョーカーは彼女から目をそらして後悔したようなため息をついた。

そんなジョーカーに、一発の猟銃の弾が命中した。

ジョーカーが銃弾が飛んできた方向を向くと、そこには猟銃や石を持った村人達の姿があった。

「化け物！」

「出て行け！」

村人達は口々にそう言い、ジョーカーに向けて銃を撃ち、石を投げつける。

ジョーカーは鋭利な両腕で自分の身を守りながら村人達に背を向けると、呻き声を漏らしながら逃亡した。

そして少女は悲しげな瞳で、逃げていくジョーカーの姿を見つめた…

…

日が沈み始めたころ、剣崎は自分が住んでいる小屋へと戻ってきた。その瞳は悲しみに彩られ、腹部にはローチに刺された傷が生々しく残っていた。

だが剣崎は傷の痛みなど痛くはなかった。

本当に痛かったのは村人達や少女からの視線だ。

避難を終えてからジョーカーになったため、少女以外の村人達には自分の正体を知られてはおらず、彼らがジョーカーとなった自分にした反応も当然のものである

いや、村人達が例え怪物の正体が自分だと知ったとしても恐怖の眼差しで自分を見ただろう。

こういった仕打ちは以前アメリカに居た時や他の地域や国の戦地で争いを止めようとした時にも受けているが、慣れる事ができるようなものではなかった。

あの目で見られるたびに、自分が人間でなくなってしまった悲哀に身をズタズタに切り裂かれる…

今まで外国の人々と気付いてきた信頼関係も仮初のものにすぎないと肌で感じてしまう。

だが剣崎は親友との約束があればこそ、こんな悲しみや自分が背負った苦しい運命に耐え抜き、人助けを続けることが出来るのだ。

この運命を選択したのはほかならぬ剣崎自身である。

始を助けたいという自分の選択で犠牲にしてしまった人々達への償いのためにも、剣崎に弱音を吐くこと、そして運命に敗北することは許されないのである。

「それにしても…あのローチが言っていたことは一体…？」

最後のローチを剣で貫いたとき、確かに人語で、「日本に来い。そこで新たな戦いが…」と言っていた。

詳しい理由はわからないが、日本で何かが起こっていることに間違いはなさそうであった。

「また…日本に帰るのか…」

剣崎は三年前、アンデッドの気配を感知して仲間達の元に向かい、自分をコピーしたカメレオンアンデッドと戦った時の事を思い出した。

だが今回のヤマはあの時よりずっと大きそうだ。

正直に言えば、日本に帰りたくはない。

あのローチの言うとおり、この件にはきつとアンデッドやバトルフ
アイト絡みの事象が関わっている。

日本に戻ればきつと、始や橘、睦月達仲間の仮面ライダー達にも出
会うことになるだろう。

仲間には会いたい、会えばきつと別れるのが辛くなる…

現に三年前も、直接会話してはいないものの、仲間の姿を見ただけ
でどつと心に悲しみが押し寄せた。

だが我儘を言っている場合ではない。

自分がいかなければきつと、とんでもない事態に発展するような気
がするのだ。

「行くか…日本へ…！」

剣崎は日本への帰還を決意し、小屋の出入り口へと向かって引き戸
を開け、外に踏み出した。

そして日本へと向かう彼の後姿を、満月が優しく照らしていた…

：

新生BOARD本部の地下深く…巨大なレリーフが保管されたそこ
に、一体の異形の姿があった。

それは剣崎や始の正体であるジョーカーに酷似していたが、体の形
状が二人とは逆になっており、体色も白に彩られていた。

白いジョーカーはレリーフに触れ、それをなぞる様になると、そ
の影からは無数のローチ達が現れ、室内を蠢き始めた。

やがてジョーカーが「人間」の姿に変化すると、ローチ達は雄たけ
びを上げながら何処かに向け蠢き始めた…

第1話（後書き）

元の作品では無駄に長かった部分を短縮していこうと思います。
個人的に元の作品とどちらが良かったか気になりますのでご意見、
感想いただければ幸いです。

二話用に用意していた物語を、思っていたよりも短かったために追
記しました。もっと考えてから投稿すべきですね…

第2話

剣崎が日本に向かっていた頃、東京都内の高級クラブが貸切で営業していた。

そこでは王冠を被り、豪華な衣装を着た一人の男がワインを飲み、バニーガール達と談笑しながら豪遊していた。

白井虎太郎：剣崎の友人の一人であり、彼ら仮面ライダーの活躍を本にし、その活躍を人々に伝えて莫大な財産を築いた青年である。虎太郎はワインを飲むのを中断し、カラオケを楽しむと、二人の地味なスーツを着た男が拍手をしながらバニーガール達と共に近づいてきた。

二人の男は出版社の人間であり、その内一人は当時虎太郎が出そうとした本をバッシングした会社の編集長だった。

今は有名人となった虎太郎の腰巾着となり、多額の金を使って彼の接待を行っているのだ。

「白井虎太郎先生に、かんぱ〜い！」

編集長は歌うのを終えて自分の椅子に座った虎太郎を称えろと、彼が書いた本「仮面ライダー」という名の仮面」をスーツから取り出した。

「いやあ、しかし当たりましたね先生のご本！何せ二千万部突破の大ヒットだ〜〜〜！！」

編集長はバニーガール達と共に彼をさらにべた褒めし、虎太郎はワイングラスを掲げて彼らに微笑んだ。

そんな中、編集長の補佐を勤めていたもう一人の社員の男が恐る恐る口を開いた。

「けど先生、そろそろ次の本お願いできませんかね？もちろん家の支社から…」

それを聞いた虎太郎は表情を歪め、グラスをテーブルに置いた。

「気に入らないなあ…」

「な、何がですか？」

編集長が聞くと、虎太郎は嫌味な目つきで彼ら二人を見つめながら口を開いた。

「早く書け書けとせかせる君達のその態度だよ。作家のナイーブな神経が全く分かってない。」

「それは気づかず失礼しました！」

「失礼しました！」

二人は土下座で虎太郎に頭を下げ、虎太郎はそれを見てニヤニヤと笑いながらワインを飲んだ。

だが虎太郎はこんな豪勢な生活の中に少しの虚無感を感じていた。確かに楽しい生活だが、どこか本当の自分ではないような気がしていたのだ。

その理由は、自分が以前感じていた充実感を感じることが出来ないからである。

以前の虎太郎は剣崎に協力して住む部屋を提供し、彼らの活躍を後世に残すために多くの出版社に強大な圧力から何度も断られながらも、ライター達のようにあきらめず自分なりに奮闘して生きていた。今はその努力が実り、この生活を手にすることが出来たのだが、虎太郎にとってはやはり自分なりに精一杯生きていた昔の方が良かったかもしれない時に思ってしまうのだ。

虎太郎がそんなことを考えていたその時、テーブルに置いた彼の金メッキコーティングを施された携帯電話が鳴り響き、虎太郎はそれを手にとって電話に出た。

電話の相手は自分の姉である栗原遥であつた。

「ああ、姉さん。ご・ぶ・さ・た！」

虎太郎はテーブルに乗ったゴミを手にとってくずかごに投げると、ゴミはくずかごにすっぽりと入った。

：

その翌日、仮面ライダーカリス・相川始は、自分の下宿先であり、虎太郎の姉・栗原遥の店である喫茶店「ハカランダ」の自分の部屋でカメラの手入れをしていた。

始はカメラマンなのだ。

そしてこの部屋も、今は亡き遥の夫・栗原晋が使っていた部屋であつた。

アンデッドである始がここにきた理由は、晋が亡くなった原因が始にあつたからだ。

始は以前カードから解放されて二年余りが立つた頃、大雪が降る谷川連峰でカリスの力を使い、ダイヤのカテゴリーク「ギラファアンデッド」と戦つた。

晋は偶然その場に居合わせ、その戦いを見ていたのだ。

だがカリスが弾き飛ばしたギラファアンデッドの剣「スケルター」が、偶然晋の腹部を貫いてしまった。

カリスがギラファアンデッドを追い払つた後、「ヒューマンアンデッド」の姿を借りた始に、晋は自分と自分の妻である遥と娘の天音が写つた写真を始に渡した。

自分の代わりに家族を守って欲しいという意味表示だった。

始はその写真を受け取り、自分でも何故かわからぬままに晋の家族

の元に訪れ、彼女達の家に住み着き、解放されたアンデッド達と戦ったのだ。

その戦いの中で人間の愛を学び、剣崎という友を手に入れ、数々の運命を乗り越えて今に至る。

「剣崎…」

始はカメラの手入れを中断すると、親友の名を呟いた。

四年前、BOARDが壊滅して間もない頃、剣崎は強く共に戦う仲間を求めた。

当時剣崎と和解していなかった始はそれをつるさく思ったが、今は彼の気持ちがよくわかる。

今の自分も昔の彼と同じで、一人で孤独な戦いを続けている。

橘が選んだ新世代ライダー達とも共闘したいとは思っていたが、彼らは耳を貸さずに自分達だけで戦い、時に後ろから自分を攻撃して自分が戦っていたアンデッドを横取りしたこともある。

自分以外に力を持つ者は強大な敵を前に力を合わせようとはせず、自分のかつての仲間達も自分を除いて戦えない。

始はらしくもなく淋しさを感じていた。

きつと剣崎もこんな気持ちだったのだろう。

仲間がここまで恋しくなったのは初めてだ。

始は重い溜息を付き、カメラの手入れをしようとした時、部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

そしてその向こうから、元気な少女が現れ、笑顔を見せた。

「ただいま始さん！」

「天音ちゃん…」

栗原天音、遥の娘である。

四年の歳月を経て中学生になった彼女は、今も変わらず明るく、少

々生意気なままであった。

天音は始の後ろに回ると、彼の肩を掴み、手ごろな強さで揉み始めた。

「おやおや、凝ってますねえお客様。」

「天音ちゃん、プレゼントの為の機嫌とりかい？」

「ちーがーう！これは私の始さんへの感謝の印よ。いつもデートしてもらってるし。」

始はふつと笑うと、「分かった分かった。誕生日はちゃんとプレゼントあげるよ。とりあえず今は上行って。俺もカメラの手入れが終わったら行くからさ。」と彼女に言った。

それを聞いた天音は元気に返事をする、急いで部屋から出て上に上っていった。

始はそれを笑顔で見送ると、そのままカメラの手入れに戻った。もうすぐ天音の誕生日のため、彼女はその日に始と楽しく過ごせる事を妄想してハイになっているのだ。

こんな辛い状況の中、始にとって唯一の救いは彼女の笑顔であった。彼女の存在と剣崎との約束があるからこそ、始も過酷な運命に絶え、戦い続けることが出来るのだ。

だが彼女の笑顔に救われたのも束の間、始の研ぎ澄まされた獣の感覚が強く疼いた。

暴れ回るアンデッドの気配を感じ取ったのだ。

「また奴らか…」

始は手入れ道具をテーブルに置くと、バイクのヘルメットを取って部屋から飛び出した。

…

東京の市街地では、ハートのカテゴリー「ウルファンデッド」がその爪を振るい、人々を襲っていた。

爪で引き裂かれた人々は次々に路面へと倒れ、ウルファンデッドは硬い地面の上に屍を増やしていく。

アンデッドの猛威が人々に振るわれていく中、バイクにまたがった始が到着した。

「カテゴリー」…上級アムデッドか…！」

始は腰に変身ベルト「カリスラウザー」を出現させ、ハートのカテ
ゴリーA「チェンジマンティス」のカードを取り出した。

「变身……！」

それを掛け声と共にカリスラウザーにラウズすると、電子音声が鳴り響き、始の体が水に似た輝きに包まれ、それが弾けると同時に、仮面ライダーカリスへと変身を遂げた。

カリスは手にカリスアローを召還すると、驚異的なジャンプ力を利
用してウルファンデッドに飛び掛り、カリスアローを振るって刃と
なっているリムの部分でウルファンデッドに切りかかった。

ウルファンデッドは後方にジャンプして刃を交わし、ニメートルほど後ろに着地すると、同じように着地して武器を構えるカリスを睨んだ。

「カリス……ウオオオオオオオオオオオ！」

ウルファンデッドは雄叫びを上げ、持ち前のスピードでカリスに遅いかかる。

だがカリスはそれをもとめせずに回避していき、自分の武器を用いた剣戟を連続でウルファンデッドに浴びせていく。

ウルファンデッドは上級アンデッドではあったが、数々の戦いを潜り抜けてきたカリスはその力を上回っていた。

劣勢のウルファンデッドはカリスから数メートル後退りすると、カリスはその鋭い眼光でウルファンデッドを睨み付けた。

「諦める、貴様では俺に勝てない。」

「…どうかな？」

上級アンデッドのため、人語を利用できるウルファンデッドは再び大きく吼えると、ウルファンデッドが殺した人間達が起き上がり、狼人間と化してカリスに襲い掛かった。

「な！？」

狼人間達はカリスに掴みかかり、動きを封じる。

ウルファンデッドの爪にはウルフヴィールスというウィルスが仕込まれており、倒した死体を狼人間「ワーウルフ」へと変える力がある。

ウルファンデッドはワーウルフを作り出し、それを手駒として操って戦う戦法を得意としているのだ。

「終わりだカリス！」

ウルファンデッドはワーウルフ達に掴まれ、身動きが取れないカリスを自分の爪で切り刻み始めた。

そしてカリスが窮地陥ったその時、志村、禍木、三輪の三人が到着した。

だが三人はすぐに变身しようとはせず、カリスのピンチを傍観し始めた。

「あーあ、やられてるぜアイツ。」

「さつさと負けちゃえばいいのよ。そうした方が邪魔者は居なくなるし、ジョーカーの力も手に入るわ。」

禍木と三輪は切り刻まれるカリスを楽しそうに見つめ、志村は彼らの中央に立って口を開いた。

「もう奴等の時代じゃない。時代遅れのライダーには、退場願おう。」

志村は危機に陥るカリスを見ると、邪な笑みを作り出し、白い歯を不気味に見せた。

…
「ふう…また駄目だ…」

新しい会社の面接を受け負えた睦月は重い溜息を付き、持っていたミネラルウォーターを飲んだ。

今日もまた面接の手応えがなかったのだ。

これでもう50社目の失敗だ。

睦月はつくづく面接や試験に弱い自分に嫌気がさした。

大学受験のときも、多くの大学に落ち、最後の最後でようやく補欠合格にありつけたのだ。

だが不況の今、就職試験は大学受験以上に難しく、睦月は受験の時以上に憂鬱であった。

睦月は再びため息をつき、もう一口ミネラルウォーターを飲もうとした。

その時、彼の前を必死に逃げ惑う人々が通り過ぎた。

「何だ？」

気になった睦月は人々が走って来た方角に行ってみることにした。

：

睦月が着いた先は自分が面接を受けた会社から数十メートル離れたビル街で、そこではカリスとウルフアンデッド、ワーフルフの戦いが行われていた。

「相川さん！」

カリスはウルフアンデッドと大量のワーウルフ達に圧倒され、劣勢だった。

睦月は今すぐにでもカリスを助けに行きたかったが、今の自分にはライダーの力がなかったため、何もできない。

睦月は悔しさでこぶしを強く握り締めた。

そしてふと周りを見回してみると、カリスのピンチを笑いながら傍観している志村達の姿を見つけた。

「あいつら！？」

睦月は以前橋に彼らを紹介してもらったことがあるため、志村達がライダーであることを知っていた。

だが自分以外に力を持った彼等はカリスを助けに行こうとはせず、むしろその危機を楽しみながら見物している。

睦月は彼らの態度に怒りを覚え、志村達の下に走り、志村の胸倉をつかんだ。

「おや、誰かと思えば上城さんじゃないですか？部外者が僕らに何か用ですか？」

志村は嫌味な口調で睦月に言い、睦月は眉間に皺を寄せて大きな声で叫んだ。

「お前ら！なんで相川さんを助けない！？同じ仲間だろ！！」
「おい。」

志村の右隣にいた禍木は睦月の手を払いのけ、志村を守るように二人の間に入ると、睦月を小ばかにした口調でしゃべり続けた。

「勘違いすんなよ。あいつは…相川始はジョーカー、アンデッドだ。あいつも俺達のターゲットだぜ。」

次に三輪が禍木の隣に立ち、彼女も睦月を見下した眼差しで話しかけた。

「ジョーカーは危険な存在よ。居なくなってくれたほうが人類にとって安全だわ。私達もジョーカーの力が手に入るしね。」

「楽しみだぜ。ジョーカーを封印したらどんなカードになんのかなあ？」

禍木の一言を聞いた睦月は堪忍袋の尾が切れ、禍木を殴り飛ばした。始をアンデッドとしか見ていないこともそうだが、以前スパイダーアンデッドに支配され、始をカード呼ばわりした自分と禍木が重なったからである。

禍木は固い地面に叩きつけられると、腫れ上がる頬を押えて逆上した。

「デメエ…やりやがったな！！」

禍木は立ち上がり、睦月を殴り返そうとした。

だがすでに睦月はそこにはおらず、上着を脱ぎ捨ててカリスの元に向けて走っていった。

…

「はぁ…はぁ…」

カリスは地面に膝を付き、肩で息をしていた。

すでに体力は限界近く、ワーウルフ達もウルファンデッドも健在だ。とても彼らを迎撃する力は残っていない。

カリスはもはやここまでかと覚悟を決めた。

その時、木の棒切れを持ってこちらに走ってくる睦月の姿を見つけた。

「相川さん！」

睦月は棒切れを杖のように振るってワーウルフやウルファンデッドを攻撃したが、効果はなく、逆にウルファンデッドに殴り飛ばされてしまった。

「うわ！？」

「睦月！」

カリスは立ち上がって睦月に駆け寄り、彼を抱き起こす。そして彼を揺すりながら安否を確認した。

「睦月、なぜこんな…」

「相川さんの戦いを見ていたら、俺も黙ってられなかったんです…」
「何？」

「志村達が相川さんの戦いを傍観してました…あいつら、相川さんが弱った所を狙って、封印しようとしてたんです。やっぱりあいつ

らは、俺達に協力する気なんか無い…

それどころか、俺達を邪魔者としか思っていないんです…俺は、貴方をカードとしてしか見ていないあいつらが仮面ライダーを名乗るなんて納得できない。

だから相川さんの力になろうとしたんですけど…

やっぱり俺なんて、レンゲルになれなきゃ、何の力にもなれませんね…すみません…」

「睦月…」

カリスは睦月を支える手に力をこめた。

彼は今まで何をやっていたのだと自分を責めた。

仲間が居ないという理由で寂しさを感じていたが、睦月はライダーの力が無くとも自分を助けようとしてくれた。

それなのに唯一力を持っていたにも関わらず、泣き言を言っていた自分をカリスは恥ずかしく思ったのだ。

そしてカリスは自分を見つめなおし、剣崎の面影に頼らず、一人でも戦うと改めて決意した。

「…ありがとう、睦月。休んでろ。」

「はい…」

カリスはアスファルトの上に睦月を寝かせると、再びカリスアローを構え、ウルファンデッド達を睨んだ。

そして「ヌン！」と叫ぶと、標的に向けて一斉に走り出す。

ウルファンデッドはワーウルフ達をカリスに立ち向かわせたが、カリスは圧倒的な力を発揮し、ワーフルフ達を瞬時にすべてカリスアローで切り伏せた。

カリスの融合係数が上がり、戦闘能力がアップしたのだ。

仮面ライダー達はエースアンデッドとの融合係数により、戦闘能力が上下するのだ。

融合係数は怒り、悲しみなどの感情により上下する。

今回のケースは睦月を傷つけられた怒り、そして今までの自分を反省し、新たな決意をしたことにより融合係数が上がったのだ。

ワールフ達をたたき伏せたカリスは次にウルファンデッドに立ち向かい、カリスアローを振るって敵を切り刻んだ。

カリスの速さはウルファンデッドを上回り、一撃、また一撃と剣戟を敵に叩き込んでいく。

「馬鹿な…何故…」

ウルファンデッドは突然のカリスの反撃に戸惑い、その勢いに押されて地面に叩きつけられた。

これを好機と見たカリスはカリスラウザーをバツクルから取り外してカリスアローにセットし、アローを醒弓モードに変形させた。

そしてラウスバンクから「フロートドラゴンフライ」「ドリルシエル」「ホークトルネード」の三枚のカードを取り出し、ラウスする。

「float:drill:tornado:spinningdance!」

カリスラウザーから電子音声が響き、カリスの体が竜巻に包まれて宙に舞い上がる。

そのままドリルのように高速で回転し、ウルファンデッドに向けて蹴り込んだ。

カリスの必殺技の一つ「スピニングダンス」だ。

スピニングダンスは起き上がったばかりのウルファンデッドを直撃し、必殺キックを受けたウルファンデッドは再び硬い地面に倒れて爆発し、バツクルが開いた。

カリスはプロパーバンクのカードを取り出すと、ウルファンデッドに向けて投げた。

カードはウルファンデッドに突き刺さり、ウルファンデッドはカードに吸い込まれて狼の絵柄がカードに描かれる。

カリスは戻ってきた「フュージョンウルフ」のカードをキャッチし、ラウズバンクにしようと、スピリットヒューマンのカードをラウズして始に戻り、寝ている睦月に近づいた。

「ち！つまんねえな。」

それを見ていた禍木は唾を吐き、志村、三輪と共にその場から去っていった。

始は睦月のそばに來ると、自分の手を差し出した。

「大丈夫か？」

「ありがとうございます。」

睦月は始の手をとって立ち上がると、何かを決意し、始の瞳をまっすぐと見た。

「何だ？」

「相川さん…俺も戦います。」

「何だつて？」

始は表情に驚きを表した。

睦月はもう戦いとは関係ない一般人である。

この件に深くかわるのとは好ましくない。

それにもう、睦月はレンゲルには変身できないのである。

「だが、お前はもうレンゲルには…」

「レンゲルにはなれないならなれないで、俺なりに相川さんをサポートします。やっぱり俺も就職活動なんかしてられない…俺も何

か、何かしたいんです！」

睦月の目には強い決意が宿っていた。

四年前と同じ戦士の瞳だ。

始はそれを見てフツと笑うと、睦月に手を差し出した。

そうだ、変身出来るか出来ないかなど問題ではない。

問題は、人々を守る意思があるかどうかである。

剣崎ならそう言うだろうと、始は密かに思った。

「…分かったよ。頼んだぞ、睦月」

「はい！」

始と睦月は共に微笑み、硬く握手を交わした。

オレンジ色に染まる空には、二人の新たな決意と友情を称えるように、夕日が暖かく輝いていた。

…

それから数日後の朝、日本に向かう船に密航という手段を持って乗り込んだ剣崎が、日本へと到着した。

「帰ってきた…三年ぶりの故郷だな…」

剣崎は久々の故郷に懐かしさと哀愁を抱いていた。

本来なら、絶対に戻ってきてはならない友人達が住む愛する故郷…

そんな故郷に、二度目の帰還を剣崎は果たしたのである。

それは中東で人々を襲った白いローチ達の謎を解明し、何が起きているかを確かめるため…

剣崎が再び、戦士に戻る時がやってきたのである。

今、運命の歯車が音を立てて回り始めた…

この先に待ち受けるのは生存か？破滅か？極限の中でその力が全開

していく…

そして、この戦いの鍵を握る運命の切り札は？

仮面ライダー剣^{ブレイド}の、新たな物語が幕を開けたのであった…

第2話（後書き）

今回はまんま元の話の展開をちょっとだけいじっただけです。
楽っちゃ楽ですが良いのかどうかはわかりませんですハイ。

第3話

本に到着した剣崎は、徒歩で自分がかつて居候していた白井虎太郎の家へと歩いていった。

虎太郎の家は元々は牧場であつたために広い庭を持ち、その敷地内に建てられていた邸宅も、古いとはいえ中々大きく、洒落たデザインの家であつた。

そこではいつも虎太郎の好物であり、愛飲していた牛乳の空瓶を片付ける手伝いをしていたことを剣崎は今でも覚えている。

何でこんなに大量に飲むのか…そしてなぜあれだけ牛乳を飲んで腹を壊さないのかが疑問であつた。

そして虎太郎は科学専門のノンフィクションライターを目指していて、その題材に仮面ライダーを使いたいため、取材させて欲しいと戦闘後に煩く頼み込んできたのが彼との出会いだった。

最初はなんて煩い奴なのだろう厄介に思っていたが、取材を受けるという約束とはいえアパートを追い出された自分に家を提供してくれたのは彼であり、また、自分が困難に直面した時に親身になってくれたのも虎太郎である。

血気盛んな性格が災いして友人を上手く作れなかった剣崎にとって、虎太郎は大事な友達なのだ。

そして、もう一人思い出すのが、広瀬栞というBOARDの女性スタッフである。

栞はローカストアண்டッドの襲撃でBOARDの三つ目の本部が壊滅した際、ついでとばかりに虎太郎の居候になった。

ルックスはそこそこ良く、中々大きなバストが男性の目を引く女性であつたが、いかんせん気が強く、腕っ節も優れていたため、剣崎と虎太郎は彼女にだけは敵わなかった。

だが気の強さの中にも脆い一面も持ち合わせており、自分の父、広瀬義人が病で死んだ母を助けるため、不死の秘密を解明するために

アンデッドを解放してしまったことを知った時は父が犯した罪の重さに苦しんだ。

アンデッドの細胞を元に開発された改造実験体・トリアルBが父の姿に変身し、今度こそ不死の秘密を得るために剣崎をジョーカーにしようとは何度も剣崎を狙った時も、戸惑いと父の姿を使われた怒りを隠しきれなかった。

だが、父の犯した罪を償うためにも、辛い気持ちをバネにしてライダーのサポートを行い、アンデッドと戦うこと。

そして、トリアルBに父が託した本当の思いを知ることによって、剣崎達と同じように強くなっていた。

剣崎が白井邸に向かっていたのは、彼らの姿を一目でも物陰で見守りたかったからであった。

虎太郎と栞に最後に会ったのは、三年前、カメレオンアンデッドが何らかの方法で解放され、それを封印するために戦った時である。

別れていたのはあの時はまだ一年と少しとはいえ、剣崎が来てくれることを確信し、ブレイバックルとラウズアブゾバーをBOARDから持ってきてくれていた時には、二人の機転に驚いた。

同時に、二人が自分を信頼してくれていたことがとても嬉しかった。あの時は辛さを忍ぶため、何も会話せずに皆の元を立ち去った。

だから本当は会わない方がきつと気持ちは楽なのだが、剣崎はどうしても友の姿を見ずにはいられない自分のメンタリティを呪った。

白井邸には虎太郎が居る…可能性は限りなく低いが、もしかしたら栞もまだ住んでいるかもしれない。

一目でいいのだ…二人の元気な姿をこの目で見たい…

そんな希望を抱きながら、剣崎は広大な白井邸の入口まで辿り着いた。

しかし…

「嘘だろ…」

広大な庭を持つ白井邸の入り口には、巨額の値段が書かれた看板が立てられ、剣崎が以前下宿していた大きな家は人の気配が全く無かった。

どうみても土地共々売却されているのである。

「どういうことだよこれ…」

剣崎は困惑したが、とりあえず庭に入り、白井邸に行ってみることにした。

：

剣崎はリビングに入ると、ソファーに座り、持っていたビニール袋を座卓の上に置いた。

白井邸は家具が残っていたが、電気が止められており、明かりがつかなかった。

ガスも止められていたために料理も出来ず、持っていた僅かな日本円を使い、コンビニで買ってきた弁当と飲み物を夕食にすることにした。

「虎太郎は何処にいったんだ…それにしても、懐かしいな。」

剣崎は僅かに微笑みながら白井邸のリビングを見渡した。

電気は止められているものの、家具のほとんどが残った白井邸は四年前のままだった。

剣崎はここで仲間の白井虎太郎、広瀬菜と共に過ごし、この家を根城にしてアンデッドと戦ったのだ。

当時の雰囲気があるまま残るこの家からは、耳を澄ませば虎太郎や菜の声が聞こえてきそうだった。

「虎太郎、広瀬さん…二人とも元気かな？」

剣崎は脳裏に二人の笑顔を思い浮かべ、瞼を閉じた。
二人の姿を見ることはできなかったが、当時の雰囲気が残る場所に
いれるだけで剣崎は幸せだった。
例えばこれが、一時の安らぎに過ぎなかったとしても…

…
翌日の午後、始と睦月はハカランダで食卓に着きながらアンデッド
への対策を論じていた。
そしてそこにはかつての自分達の仲間、広瀬栞の姿もあった。

「でもすみません広瀬さん、広瀬さんの仕事もあるのに…」

睦月は栞に頭を下げて謝罪した。

栞はBOARDには戻り、新世代ライダーのバックアップを行って
いた。

だが彼女は睦月が自宅まで協力を頼みに来た際、快く協力を承諾し
てくれた。

栞は謝る睦月に微笑むと、テーブルの上で両手を組んで口を開いた。

「何言ってるのよ。他ならぬ昔の仲間の頼みだもの、断る理由なん
か無いわ。」

「でも…」

「それに…！」

栞は新世代ライダーたちの事を思い出し、うつむいて握り拳を作る
と、それを思い切りテーブルに叩き付けた

「私あいつら嫌いなものよ！偉そうにふんぞり返って！この前なんか
役立たずって言ったのよ！だったらあんたらのサポートなんかこつ

ちから止めてやるわよ！あゝ！腹立つ！」

睦月と始は怒り狂いながらグリグリと拳を握り締める筈に呆けながら、自分達のコーヒーを飲んだ。

：

その頃、剣崎は旧白井邸を出、街のネットカフェに繰り出していた。あの白いローチに関係することを調べるためである。

仮面ライダーは圧力によって公の場からは存在が隠されていたものの、ネット上ではその戦いの目撃情報から都市伝説となっていた。なのでローチ達の目撃情報なども転がっているのではないかと考え、ネットカフェで情報を集めていたのだ。

しかし、ローチの情報は見つからなかった。

代わりに見つかったのは剣崎にとってそれよりも恐ろしい情報であった。

「これは！？」

ネットカフェの個室でパソコンを操作していた剣崎は椅子から立ち上がり、思わず声を上げた。

剣崎が見つけた情報は、様々な生物の姿を象った怪物達の目撃情報や、携帯やデジタルカメラで撮影した画像であった。

その怪物達の正体こそ、今や自分の同類である様々な生物の始祖達「アンデッド」である。

：

ネットカフェを出た剣崎は、一人街を歩いていた。

剣崎の頭の中は今アンデッドの事で一杯だった。

なぜ封印した筈のアンデッドが解放され、再び暴れ始めたのか？

三年前カメレオンアンデッドを解放した誰かがまた愚かなミスを犯

したのだろうか？（剣崎は橘がカメレオンアンデッドを解放した事を知らない）

分らないことだらけであつたが、唯一分かることはローチが言った言葉の意味であつた。

ローチは日本で新たなバトルファイトが始まる。だから貴様も来いと言つていたのだ。

だが、あのローチ達がなぜ出現し、誰が奴等を操っているかはまだわからない。

そして自分が見つけた目撃情報の中には、仮面ライダーの情報もあった。

始達の事であろう。

自分も日本に来た今、彼らと力を合わせなければならぬ。

だが…始達と接触する踏ん切りは付けられなかった。

アンデッド達が再び解放された今、自分と始が会つてもまだ闘争本能は抑えられる。

だが自分達二人以外のアンデッドが全て封印されたとき、ジョーカーの闘争本能が掻き立てられ、二人のジョーカーは最後のバトルファイトを始めてしまう。

そしてどちらが勝つたとしても、世界の滅びが始まる。

自分と始は決して会うわけには行かないのだ。

「どうすればいい…俺は一人で戦えるのか…？」

黒幕はローチまで操り、今またアンデッドまでが活動を再開している…

仲間に頼らず、自分一人で戦うことができるだろうか？

剣崎は不安を拭うことはできなかった…

そんな時、剣崎は行列が出来ている一軒の本屋を見つけ、立てられていた看板を見て足を止め、目を大きく開いた。

「あれは…！」

その看板には「大作家！白井虎太郎サイン会！」と金ぴかの文字で書かれていたからである。

…

「ふう…はい、どうぞ。」

「ありがとうございます！」

虎太郎のサインを貰った来店客は虎太郎に大声で礼を言い、彼の前を去って次の来店客へと交代する。

虎太郎はまた手馴れたペン使いでサインを書き、また来店客が次の来店客へと交代する。

彼は次々にサインを書いていくが、やはりこれは本当の自分じゃないと感じていた。

自分のファンにサービスすることは本当に素敵なことだと思っているが、何かがやはり違う。

虎太郎は今の自分に虚脱感を抱いていた。

そんな虚脱感に悩まされながら次の来店客にサインをしようとしたが、今順番が回ってきている客人は中々色紙を差し出さない。

「あの…どうしたんですか？」

虎太郎は客人の顔を見上げた。

だがその客人の顔を瞳に映した瞬間、虎太郎はペンを落とした。

「久しぶりだな。」

客人は自分の友人であり、自分が書いた本の主演の一人である青年、剣崎一真であったからである。

「虎太郎。」

「剣崎君…」

虎太郎は椅子から立ち上がり、まっすぐにどこか悲しげに笑いかける剣崎を見つめた。

そしてそんな剣崎の顔を見ると、懐かしさで目じりが熱くなった。

「剣崎君… 剣崎君！」

虎太郎の目からはとうとう涙が溢れ出し、テーブルの上に向かってから剣崎の胸に飛び込んだ。

「ちょ… おい虎太郎！」

「うわあああん！ 剣崎君久しぶりiiiiiiii！」

虎太郎が剣崎に抱きついた瞬間、来店客達は混乱し、小規模なパニックが起きた。

…

とりあえずサイン会を終えた虎太郎は剣崎を連れて行きつけの高級レストランの窓側の席に座り、料理とワインを注文をした。

虎太郎は嬉しそうに笑いながら剣崎を見ると、陽気に話しかけた。

「それにしても剣崎君、ほんつとくに久しぶりだね！」

「ああ、俺も会いたかったよ。」

「今まで何処に居たの？ 何してたの？」

「中東に行ってたよ。そこで、内戦に苦しめられてる人達を助けた。」

「そうか… 剣崎君らしいね！」

剣崎と虎太郎は友人らしく心を許しあった会話をし、心を和ませていた。

久しぶりの友人との再会…

暫く離れていた間、剣崎も虎太郎も今この時間を本当の至福の時間だと思っていた。

寂しい旅路を続けてきた剣崎も、豪勢だが自分を偽り続ける虚脱感を日常に感じていた虎太郎も、この時だけはあの時間に戻れている気がしたのだ。

厳しくも充実していた時間だった、あの四年前の日々に…

そして丁度空腹となってきた頃、注文した高級料理の数々が運ばれてきた。

ステーキ、ロブスター、その他豪華な食材を使った料理の数々と、ビンテージ物のワインが食卓に並ぶ。

剣崎はナイフとフォークを使ってステーキを切り、口に運ぶと、その上品な味に舌鼓を打った。

ここ数年、これほど味の濃い物は食べていなかった。

剣崎は日本を離れて戦地に行った時、実際に戦地に近い場所に住む人々の食生活を体験して驚きを隠せなかった。

テレビを見て、貧しい国の食生活が厳しいことは頭では分かっていたが、実際に体験してみると厳しい現実を生きる人々の姿に身を切られるような思いを味わう。

改めて日本に生きる人々の食生活の贅沢さを、剣崎はこの時肌で感じた。

一方、虎太郎はグラスにワインを注ぐと、慣れた動作で匂いを楽しんでから酒を飲み始めた。

剣崎はそんな虎太郎に違和感を感じると、ナイフとフォークを止めて彼に話しかけた。

「お前、そういえば牛乳はどうしたんだよ牛乳？」

四年前、虎太郎と言えば牛乳というほど彼は牛乳が大好きだった。それが今やワインなど、当事者から見れば違和感を感じずにはいられない。

「嫌だなあ…飲むんだったらワインでしょ！ま、ビンテージ物に限るけどね。」

虎太郎は剣崎の質問に少し嫌味な喋り方で答えた。

剣崎は眉を潜め、ナイフとフォークを置くと、少し呆れ気味な口調で言った。

「お前しばらく見ないうちに…嫌な奴になったな…」

「…やっぱり、そう見えるかな。」

それを聞いた虎太郎は寂しげな目をし、グラスをテーブルに置くと、うつむいて頬杖を付いた。

「虎太郎…悪い、言い過ぎたか？」

「うつん、良いよ。僕さ、急に本が売れて、皆にちやほやされて、悪い気分じゃないんだけどさ、充実感が感じられないんだ。」

「なんかさ…今の自分は本当の自分じゃない気がするんだよねえ…」

「…そっかあ。」

虎太郎も虎太郎で、苦勞しているのだと剣崎は思った。

確かに四年前のアンデッドとの戦いは強烈に皆の記憶に焼き付いている。

あんな経験をした後だと、何をしても充実感を感じられなかったり、思い出が強すぎて上手く世渡りが出来なかったりもするかもしれない。

い。

剣崎自身、四年前、アンデッドと戦っていたところが一番幸せだったと、不謹慎ながら思っていた。

戦いを避けるためにアンデッドになりながら、戦っていたところが幸せだったと感じる…

悔しいが、自分は戦士なのだと心の底から剣崎はそう思った。

もしも戦いが終わった後、清掃員でもやれていれば清潔な心で新しい人生を歩みだせたのだろうか？

勿論、今の自分に後悔などしていないし、自分が得た力で守れるものを守っていければいいと、もう心に誓ってはいるが。

「そついえば剣崎君、僕の書いた本読んでないよね？えっと…」

虎太郎はスーツの懷に手をつ込むと、ブレイドの写真が表紙に印刷された本「仮面ライダー」という名の仮面」を取り出し、剣崎に渡した。

「それ、僕が書いた本なんだ。読んでみてよ。」

「ああ、分かった。」

剣崎は本を開き、懐かしむように読み始めた。

本には始のことについてはあまり詳しく書かれていなかったが、ライダー達の戦いの記録がほぼ詳細に書かれていた。

戦えない人々の分まで戦うと決意し、武器であるカードが一枚も無い状態で戦って勝利したブレイドとコーカサスビートルアンデッドの戦い。

他のライダー達と対立を繰り返し、人間とアンデッドの狭間で苦しみながら、その中でブレイドと友情を結んだカリスの物語。

愛する人を殺され、相討ち覚悟で激戦を繰り広げたギャレンとピーコックアンデッドの決戦。

邪悪な意思から自分を救おうと身を犠牲にしたタランチュラアンデッドと、自分と心を通わせたタイガーアンデッドの力を借り、スパイダーアンデッドの支配に打ち勝ったレンゲルの復活劇。

その他にも数々の戦いが本には記されていた。

剣崎は本を読み終わると、ぱたりとそれを閉じ、テーブルに置いた。

「いいじゃん虎太郎！いろんなこと思い出しちゃったよ！」

「ありがと、その本あげるよ。剣崎君には一番献本したかったんだけど…居なくなっちゃったからさ…」

「ごめん…」

虎太郎は剣崎の謝罪を、「いいよ」と笑って許した。

そんな時、外から人々の悲鳴が聞こえ、剣崎達は驚いて窓から外を見た。

「あれは!?!」

剣崎は目を見開いた。

窓の外にはスピードのカテゴリ－A・ビートルアンデッドが出現し、その剛力で人々を襲っていたのだ。

「どういうことだよ剣崎君！全部封印したんだろ!?!まさか、最近ネットで回ってる目撃情報って…」

「間違いない…誰かがアンデッドを開放したんだ!?!しかもあれはスピードのカテゴリ－A…俺は奴を封印したカードを使って…ブレイドに変身していたんだ!」

剣崎は椅子から立ち上がると、大急ぎで店外に駆け出して行き、虎太郎も彼の後に続いた。

…
ビートルアンデッドは周囲に居た人々を捕まえては殴り、首を絞めて首の骨を折る等を繰り返して命の灯を残酷に消していく。

剣崎はそんなビートルアンデッドの前に立ちはだかると、ジョーカーに変身し、オールオーバーをその手に召喚した。

ビートルアンデッドは「ジョーカー…」と古代語で呟くと、自分自身の手にもオールオーバーを召喚した。

オールオーバーはビートルアンデッド及びコーカサスビートルアンデッドの武器でもあるのだ。

ジョーカーとビートルアンデッドはお互いの剣と剣をぶつかり合わせて剣戟戦を繰り広げる。

剣と剣が火花を散らす激しい戦闘ではあったが、戦闘能力はジョーカーの方が上の為、すぐにビートルアンデッドはジョーカーの攻撃によって追い詰められた。

窮地を悟ったビートルアンデッドは何かを呼ぶように雄叫びを上げると、ビートルアンデッドの後ろから三体のアンデッドが出現した。ローカストアンデッド、ディアアンデッド、ジャガーアンデッドの三体である。

三体の下級アンデッド達は群れを成してジョーカーに襲い掛かったが、弱いアンデッドがどれだけ集まったところでジョーカーにはかなわず、攻撃を次々にかわされ、瞬時にオールオーバーで切り裂かれた。

切り裂かれたアンデッド達はプライムベスタと化し、ジョーカーの手に収まると、ジョーカーは再びビートルアンデッドを睨んだ。

ビートルアンデッドはその眼光に恐怖を抱き、ジョーカーに背を向けると、一目散に逃亡した。

ジョーカーはすぐにビートルアンデッドを追おうと思ったが、その寸前、虎太郎の叫び声が耳に届いた。

「剣崎君！あれ！」

ジョーカーはすぐに、虎太郎の方に視線を移す。

虎太郎はビートルアンデッドが逃げた方向とは別の方角を指差しており、ジョーカーは虎太郎の示す方向に視線を移すと、驚いて一歩足を踏み出した。

そこには剣崎と虎太郎も見たことが無い三人のライダーの姿があったのだ。

「あれは…」

ジョーカーは困惑した。

あの三人はカリスでもギャレンでもレンゲルでもない…
変身ベルトを見るとレンゲルのベルトに似ているが、中心に刻まれているのはクラブではなく、「A」のマークー文字だ。

三人共、本当に初めてみるタイプの仮面ライダーである。

その内の一人、緑色のライダーが、中心の金色のライダーに向けて話しかけた。

「見ろよ志村、ジョーカーだぜ。」

次に女性のように細身のスタイルをした赤いライダーが、金色のライダーに話しかける。

「カリスになっていない所を見ると、相川始じゃない…純一、もしかしてあれがアンデッドを解放したもう一体のジョーカーじゃ…」

最後に、金色のライダーが、まるで仲間の指揮を取るように言葉を発した。

「可能性は高いな。禍木、夏美、ここでジョーカーを封印するぞ！」

三人のライダーは剣、槍、弩の各々のラウザーを取り出し、それを構えると、ジョーカーに向かって襲い掛かってきた。

白いローチと再び解放されたアンデッド…それに謎の仮面ライダー…多くの謎が剣崎へのしかかっている…

全ての謎の答えを運命に求めるように、剣崎は叫び、問うた。

「何者なんだお前達は…一体何が起きてるんだ!？」

第3話（後書き）

広瀬さんとニースンの中の人引退しちゃったけどブレイドの続きやるんなら頼まれたらやってくれるよね。

…くれるよね？

ニースンネタをやりまくってる黒田さんと比べると広瀬さんの中人は難しそうだなあ…

でもオリキャラなんて物を出すよりは広瀬さんを出した方が二次創作はいいですね。

第4話

グレイブ…ラルク…ランス…

三人の新たなライダー達は自分達のラウザーを構え、剣崎が変化したジョーカーに襲い掛かった。

グレイブの剣が、ラルクの刃が、ランスの槍が息のあったコンビネーションで次々にジョーカーを攻め立てていく。

ジョーカーはライダーが相手のため、力をセーブしていたものの、三人の猛攻撃に徐々に追い詰められていく。

「何者なんだお前達は…一体何が起きてるんだ!？」

ジョーカーは状況が理解できないまま、三人のライダーの攻撃を自らの剣で受け止め、防御していくことしか出来なかった。

だがジョーカーがグレイブ達に追い詰められていく中、始と睦月が現場に到着した。

「相川さん! あれ!」

「間違いない…あれは剣崎だ!」

ジョーカーの姿を見つけた二人の表情は驚愕に彩られ、眼を大きく開いた。

ハカランダに居た二人は、広瀬と共にコーヒを飲みながら待機していた。

そんな時、始がアンデッドの気配を感じ取った。

だがカテゴリーAや他の下級アンデッドのほかに、別の気配を持つアンデッドの存在も始はキャッチした。

その気配は自らの正体であるジョーカーと全く同じ感覚を持ち、さらに懐かしさがその中に含まれていた。

そして直後に広瀬のノートパソコンに入っていたアンデッドサーチヤーが反応し、A、5、6、9の四つのカテゴリーのアンデッドのほか、ジョーカーの反応まで探知された。

睦月と広瀬はそれが剣崎の物か以前B A O R Dを襲い、ラウズカードを奪ってアンデッドを解放した三体目のジョーカーの物か迷ったが、始は感じた懐かしさからそれが剣崎だと確信した。

そして現場に到着すると、三年前に自分達の前に現れたのと同じ、剣崎が変化した始と全く同じ姿を持つジョーカーが、新世代ライダー達に襲われている所を発見したのだ。

「志村達…あれが剣崎さんだって知らないんだ！」

「剣崎…やめろおおおおおおおおお！！！」

始はチェンジマンティスのカードを取り出し、腰に出現させたカリスラウザーにラウズすると、カリスに変身し、ジョーカーの救援に向かった。

「剣崎！！！」

カリスは三人のライダーに殴りかかり、ジョーカーから引き離すと、ジョーカーを守るように彼の前に立ち、三人を睨んだ。

「始！？」

「大丈夫か剣崎！？」

カリスはジョーカーの方に顔を向けて彼の無事を確認すると、再びグレイブ達に視線を移す。

「貴様ら…何のつもりだ…！」

「それはこっちの台詞だぜ。」

「そいつはアンデッドを解放したジョーカーよ！邪魔するならアンタも封印するわ！」

「所詮貴方もアンデッド…信用なんて出来ませんね！」

三人は再びラウザーを構えると、次はカリスをターゲットに変えて再び襲い掛かった。

カリスはカリスアローを召喚し、三人のラウザーの刃を防御すると、その俊敏な動きでグレイブ達に応戦した。

旧世代の中でも最高クラスの実力を持っているカリスは、敵が三人でも劣勢にはならず、互角に戦いを進めていく。

だがやはり一対三の戦いでは分が悪く、カリスは徐々に三人の攻撃に捉われていった。

共同運用を全体に開発された新世代ライダーたちのコンビネーションは完璧で、彼らはこれを武器にして多くのアンデッド達を難なく倒してきたのだ。

やがてグレイブの突きがカリスの胸部にクリーンヒットし、カリスは硬い路面に叩き付けられた。

「始！」

ジョーカーはカリスを助けに向かおうと思ったが、足元にラルクがガンモードに変形させたラルクラウザーから放ったエネルギー弾が命中し、邪魔をされた。

「次はテメエの番だ！」

ランスの怒号と共に新世代ライダー達は再びジョーカーを標的とし、ジョーカーに向けてダッシュで迫る。

「やるしかないのか…！」

ジョーカーはオールオーバーを握り締め、渋々彼らに応戦することを決め、彼らに向けて走った。

人間が変身したライダーと戦うつもりはないが、ここで倒されるわけにはいかないのだ。

だが戦う決意をしたジョーカーと新世代ライダー達が激突する寸前、「待て！」という叫びが周囲に響いた。

ジョーカーと新世代ライダーは反射的に足を止め、戦いを見ていた睦月、虎太郎、そしてカリスと共に声が聞こえた方向を振り向く。彼らが見た場所は石段の上で、そこには黒いスーツとサングラスを身につけた橘朔也の姿があった。

「久しぶりだな剣崎、会いたかったよ。」

「橘さん……」

ジョーカーは変身を解き、剣崎に戻って橘の名をつぶやいた。

カリスや新世代ライダー達も変身を解除すると、橘の方を見た。

そして剣崎は一步身を乗り出すと、大きな声で言った。

「これは一体どういうことなんですか！？それに……」

剣崎は志村達新世代ライダーの方を振り向き、彼らが持ったバックルを睨む。

「こいつらは……このライダー達は一体何なんです！？それに……何でアンデッドが！？何か言ってください！！」

橘は暫く剣崎を見つめた後、背を向けると、「ついて来い。」と言だけ言った。

とりあえず何が起きているのかを知るため、剣崎は納得はまだ出来

なかったものの、橘に従うことにした。
虎太郎、始や志村達も剣崎と橘に続き、後を追った。

…

橘が案内した先は、海辺の断崖絶壁の付近に作られた新しいBOA RD本部だった。

剣崎達は様々なセキュリティを解きながら本部の通路を歩く橘に続いて歩いていると、橘は淡々と喋り始めた。

「四年前…ジョーカー以外の全てのアンデッドを封印し、我々のライダーとしての戦いは終わった…いや、終わった筈だった…」
「筈だったって、どういうことなんです！」

剣崎は声を荒げて橘に聞いた。

橘はそのまま淡々とした調子で話を続ける。

「新たなアンデッドが一体出現したんだ。三体目のジョーカーがな。」

「！？、俺と始の他に、ジョーカーがもう一体…」

「そしてこの本部を襲い、烏丸所長に重傷を負わせて研究に使っていたカードを奪い、その大半を再び解放してしまったんだ。レンゲルとブレイドの変身に必要なカテゴリーAも含めてな。」

「所長は…所長は大丈夫なんですか！？」

剣崎は橘の肩に手を置き、烏丸の安否を聞いた。

剣崎にとって烏丸は自分をライダーに選んでくれた恩人である。

彼の無事を気にするのは当然である。

「所長はここから少し遠くの病院に入院している。後から会いに行つてやつてくれ。…話を戻すぞ。クラブのAが解放されたために、

睦月は戦えなかった。ハートのAとダイヤのAだけは無事だったが、俺は所長の代理をしなければならぬから前線には立てず、始だけでは手が足りなかった…」

「という訳で、今は私達が仮面ライダー。」

三輪が橘の会話に割り込んで言った。

橘は足を止めて志村たちのほうに振り向くと、途切れた話を再開した。

「改めて紹介しよう。志村純一、禍木慎、三輪夏美君だ。」
「宜しく、そしてさよなら。」

三輪は剣崎を馬鹿にしたような笑みで笑うと、剣崎は「な!？」と声を漏らした。

すると三輪の横から志村が割り込み、剣崎を見て言った。

「よせ夏美、お年寄りはいたわるべきだ。」

次に禍木が剣崎に歩み寄り、イラついた眼差しで剣崎を睨みながら口を開いた。

「言っとつけどな、最強のアンデッドだかなんだか知らねえが俺達の邪魔だけはすんなよ?分かったな?」

剣崎は三人の悪質な態度に戸惑いながらも、中東で襲ってきたローチの背後にいる者が分かった。

あれは三体目のジョーカーからの刺客だったのだろう。
新たなジョーカーもアンデッドなら、自分を倒そうとするはずである。

その為に刺客を利用し、自分が根城にしている国…日本に標的を呼

び寄せたのだ。

「（三体目のジョーカーは俺をおびき寄せるために自分の手下を中東に送ったんだ…許せない！あのローチのせいで何人もの罪のない人々が…何処だ…そのジョーカーは何処にいるんだ…？）」

剣崎はまだ見ぬ敵を前に気を引き締め、唇をかみ締めた。

…
橘から一通り話を聞き終えた剣崎は、虎太郎と共に始と睦月によってハカランダに招かれた。

「剣崎君！」

「広瀬さん！」

そこで栞と再会した剣崎は硬く握手をし、再会を喜んだ。
そして次に睦月の方を向くと、近づいて彼の肩に手を置いた。

「さつきは話せなかったけど、睦月も三年振りだな。」

「お久しぶりです剣崎さん。あの時はありがとうございました。」

睦月はカメレオンアンドレッド戦の事を思い出し、剣崎に礼を言った。
そして最後に始の方を見ると、深刻な顔つきで口を開いた。

「始…」

「剣崎…会えて嬉しいぞ。」

「…ああ、俺もだ。さつきはありがとう。」

剣崎も始もお互いの再会を喜んだが、その心中は複雑だった。
本来なら戦う運命が定められた二人はもう出会ってはならない。

それが新たな脅威を拭い去るため、再び出会ってここにいる。

剣崎も始も嬉しさ半分、複雑さ半分で喜んでばかりいられないのだ。それに、長くここに居ればまた仲間達と別れるのが辛くなる。

剣崎は名残惜しそうに、仲間達に背を向けた。

「ちよつと剣崎君！何処行くのさ！？」

虎太郎は慌てて剣崎を呼び止めると、剣崎は振り向いて口を開く。

「悪いけど、俺は皆と一緒ににはいられない…アンデッドや三体目のジョーカーとは、一人で戦うよ。」

「そんな…水くさいですよ剣崎さん！」

睦月も剣崎を引きとめようと、一步身を乗り出してそういった。

しかし、剣崎は寂しげな笑顔で首を振り、次に始と視線を合わせた。

「俺が居ると、いつ何が起こるか分からない。俺と始は…ジョーカ
ーなんだ。」

始も唇を噛み、嫌でも自分達の立場を思い知った。

剣崎と始はジョーカーである。

今はアンデッドが解放されているものの、いつ、どんなタイミングで闘争本能が掻き立てられ、バトルファイトを始めてしまうかわからない。

そうなれば、世界の破滅が訪れてしまう。

そして剣崎は、仲間達全員の顔に交互に視線を合わせ、話を再開する。

「それにさ…皆と一緒に居ると辛くなるんだ。俺は、いつまた皆の前から居なくなるか分からないからさ。寂しい思いはしたくないし、

させたくもない。」

剣崎の言葉に、皆が俯き、沈痛な表情に染まっていく……
だが剣崎は、すぐまた笑顔に戻り、皆を諭すように口を開いた。

「大丈夫！今の内なら二度と会えないわけでもないしさ、会おうと思えばいつでも会えるさ！じゃあな、始、睦月、虎太郎、広瀬さん。久しぶりに皆の顔が見れて嬉しかったよ。」

剣崎は仲間達に別れを言うと、店を出て行った。

虎太郎は去っていく剣崎の後姿を見つめ、唇を強く噛んだ。

栞はそんな虎太郎の様子を察すると、彼の肩に手を置き、優しい口調で言った

「大丈夫よ白井君。また会えるわ。」

「……うん。」

始と睦月もまた、悲しげな顔で剣崎を見送っていた。

今の自分達に、剣崎を救うことは出来ない。

同じ仮面ライダーとして、戦友に何もしてやれず、無力感だけが募っていく……

自分達はいつも剣崎に助けられてきたのに、剣崎には何もしてやれない。

それが何より齒がゆかったが、今の二人にその無力感を拭う術はなかった……

第4話（後書き）

短かったですでしょうか？次回はブレイド復活まで行く予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4992y/>

仮面ライダー剣 MISSING ACE-NEO-

2011年11月18日04時30分発行